

女性雑誌出版史と『ナチ女性展望』 *NS Frauen Warte*

桑原 ヒサ子

はじめに

女性雑誌『ナチ女性展望』（1932年7月1日号～1944/45年号）⁽¹⁾は、さまざまなナチ女性組織を統合した「ナチ女性団」の機関誌として創刊され、組織的勧誘と低価格により、瞬く間に女性雑誌市場で発行部数第一位となった。この雑誌の表象分析を通して、表紙に見るジェンダー、母親像、敵と味方の表象などのテーマを設定して、連合国やほかの枢軸国の雑誌と比較する共同研究を行ってきた。これまでの研究は共時的だったが、ここでは、ドイツにおける女性雑誌出版の歴史を辿り、その変遷史における『ナチ女性展望』の位置を確認する通時的アプローチを取る。

女性雑誌とは女性を読者対象とし、女性の利益となる内容を提供する定期刊行物であると規定すると、その出版は女性の教化を目的とした「道徳週刊誌」*Moralische Wochenschrift* まで遡れる。その後の女性雑誌の変遷を辿ることは、1つには、個人で出版していた雑誌が、19世紀後半以降、機関誌として発行されるようになり、世紀転換期には新聞・雑誌コンツェルンといわれる大出版社による商業雑誌の興隆期を迎えるまでの出版形態の発展や雑誌の種類が多様化を確認することになる。この発展が、他方では、家庭内で雑誌を読み始めた女性たちが自ら書くようになり、やがて雑誌の出版を通して社会参画し、権利を獲得しようとする過程と重なることが明らかになるだろう。

1. 18世紀の女性とジャーナリズム

18世紀のドイツ人の多くは、まだ読み書きができなかった。1700年頃の識字率は5%で、その100年後には、それでも25%に上昇している。⁽²⁾ 識字率が上がったのは市民階級で、それに伴い市民階級で読書する女性たちも増加した。18世紀には雑誌発行が定着し、特にイギリスの影響を受け、20年代に登場するや急速に広がった「道徳週刊誌」は女性読者層を生み出すことになった。

(1) 啓蒙の世紀

啓蒙主義は、道徳と理性を尊重し、正しい立法と教育を通じて人間生活の進歩・改善、幸福の増進を追求した。「道徳週刊誌」は啓蒙思想を拡大

し、その価値観の世論形成を目的としていた。読者対象は幅広い教養市民層、そして女性だった。市民階級の比較的上位の女性は教養があり徳が高いことが望まれ、自分で考えることが宣伝された。ただし、当時の不十分な女子教育のため、週刊誌の記事は難解な表現は避けられ、ページ数も少なかった。しかし、このことによって、定期的に刊行される雑誌は読書の負担も少なく、読書習慣を身につけることにつながっていった。

ドイツ初の女性向け道德週刊誌の1つである『理性的女性批評家たち』*Die vernünftigen Tadlerinnen* (1725年～1726年)⁽³⁾を見てみよう。当時の雑誌の出版者が例外なく男性の学者や文学者であったように、この雑誌の発行者も文学・哲学者であるヨハン・クリストフ・ゴットシェート Johann Christoph Gottsched (1700年～1766年)だった。しかし、彼自身は表には出ず、カリステと彼女の上品な友だちのフィリス、フランス語とラテン語を能くするイーリスという架空の市民階級の女性たちに託して、1人称で人間の誤りや弱点を批評させている。道德週刊誌は全般的に、虚構の対話、手紙、寓話や物語によって啓蒙主義を伝えようとした。

特徴的だったのは、そうした雑誌の内容について読者に投書や投稿を求めた点である。しかし、投書の多くも虚構で、自称読者が誌上で伝えたい重要なテーマを取り上げて感動したと伝えるものだった。それでも、市民が道德的世界観について意見を述べるができる新たな公的場が誕生した意義は大きかった。こうして道德週刊誌は、読むことから自己表現することへと女性を導き、道德週刊誌ごとに固定的読者サークルが生まれた。

女性にも男性と同様の精神性を認めて与えるために、女性は教化されるべきであるという啓蒙主義の考えは、女性解放に好意的ではあったが、女性の本来の活動範囲が結婚生活である点は全く問題視しなかった。教育は、家事の義務を守って行われるものであって、就労するための職業教育ではなかった。

(2) 女性による雑誌の登場

18世紀において市民階級の女性が職を得て、社会に出ることは考えられなかった。阻害要因は2つある。1つは、女性の不十分な教育だった。女子教育の内容は、手芸、フランス語、楽器演奏とダンスに限られていた。もう1つは、女性の義務は家事と家庭に限定されるという確固とした社会通念であった。妻の就労は、夫の経済力の欠如を意味したし、未婚女性が就労すれば、結婚の機会はなかった。その一方で、家庭内でも手紙を書くことは女性も一般的に行っていた。雑誌を出版するための職業教育などな

かったし、雑誌出版は生計を立てられる職業でもなかった。女性が雑誌を出版するようになる背景には、こうした事情があった。そして、雑誌を執筆し出版する女性たちが初期には実名を明かさなかったのも、当時の性役割分業観を逸脱することを怖れていたことだった。

18世紀後半になると、道徳週刊誌に刺激され、妻として母としての家庭内の仕事をこなしつつ雑誌に投稿し、雑誌を出版する女性たちが登場する。

出版順に見てみると、『ハンブルクの娘たちのために』*Für Hamburgs Töchter* (1779年)のエルネスティーネ・ホーフマン Ernestine Hofmann (1752年～1789年)は、男性を装って雑誌を出版している。女性読者に助言を与えるのに都合が良いように、年配の男性賢者という権威を利用した。⁽⁴⁾

少し遅れて同年に『女性のために』*Für's schöne Geschlecht*を発行したシャルロッテ・フォン・ヘーツェル Charlotte von Hezel (1755年～1817年)は、実名は伏せていたが、女性であることは公表している。内容は家政にとどまらず、女性教育に寄与したいとの思いから、芸術史や文学、医学や自然科学の記事を載せ、娯楽的文学はなかった。8頁で週2回発行されたが、8ヶ月で廃刊となっている。⁽⁵⁾彼女の夫がギーゼン大学教授であったことから、教授夫人たちと、1786年に女性読書協会を設立し、毎週女性作家の作品を読んだ。当時、新しい読書文化の社会的結節点としての読書協会設立が相次いだが、女性だけのものは初めてだった。

実名で雑誌を発行した最初の女性は、ゾフィー・フォン・ラ・ロッシュ Sophie von La Roche (1730年～1807年)だった。彼女の『ドイツの娘たちのためのポモナ』*Pomona für Teuschlands Töchter* (1782年～1784年)は月刊誌で、約100頁であった⁽⁶⁾が、記事はほぼ自分一人で執筆した。内容と目的は道徳週刊誌に依拠していたが、楽しく女性読者を教育するために、手紙、対話、詩などの多様な形式を採用し、外国の紹介、文学の様々なジャンルの読書を推奨した。中でも女子教育は重要なテーマで、「リナへの手紙」の形で伝えられた。また、道徳週刊誌との大きな違いは、読者とのコミュニケーションの重視だった。道徳週刊誌では多くは虚構であった投書は、読者との本物の接触に変わり、後の女性雑誌の特徴である「投書欄」の初期の形となった。

ラ・ロッシュもそうだったが、月刊誌『アマーリエの休息时间』*Amaliens Erholungsstunden* (1790年～1792年)を発行したマリアンネ・エールマン Marianne Ehrmann (1755年～1795年)も文筆活動を経てから雑

誌出版に手を染めている。とはいえ、小説は匿名で出版し、名前を明かすのは成功してからのことである。この雑誌においても女性教育の最大の目的は結婚の幸せであり、女性は「妻の賢い教育者である」夫に従う立場と位置づけられている。むら氣なミンナと理性的なアウグステの見せかけの文通を通して、悪に対する道徳的善の勝利を伝えようとした。読者の手紙も掲載し、この雑誌が意見交換の場となり、女性たちが少なくとも社会参画する機会となるよう努めた。彼女は再婚相手の作家フリードリヒ・エールマンの出版業を助けたが、夫も妻の雑誌に歴史、地理、人間学の記事を執筆した。

次第に読書人口が増加し、それによって雑誌出版数も拡大し、出版物も変化した。初期には互いに顔見知りの女性読者の小さな読書サークルだったが、今や増大した顔の見えない読者に対して執筆する必要性が生まれた。市場競争に勝つためには、有名な女性著述家の記事が掲載され、内容も多様であることが求められた。それには報酬を伴う女性協力者の存在が不可欠になった。こうして、執筆する女性数は増加し、この仕事で名を成す者も出てきた。その一方で、女性出版者は減少した。増大する雑誌費用は、世間に向かって、とりわけ男性に対して依然として副業と思わせることが不可能になったからである。

18世紀後半の女性出版者は、雑誌を通して女性が意見交換できる場を提供した。教育の目的である「『教養ある』主婦であり妻」という女性像もたしかにこれまでにないものだった。しかし、女性が私的領域に留まって権利も自立もなく父や夫に従う存在であることには変わりがなかった。啓蒙的・教訓的内容の女性雑誌は、次第に人気を失っていった。女性雑誌が再び注目を集めるのは19世紀半ばのことで、それは教化目的ではない、政治的女性雑誌だった。

2. 19世紀の政治的女性雑誌

1830年のパリ革命により、ドイツにも伝わった革命の理想は女性にも影響を及ぼした。女性たちは自分たちが置かれた差別的な社会状況を認識し、1840年代に至る「三月前期」、とりわけ1848年、1849年の革命期に、新聞・雑誌を通して女性にも市民の権利と義務を与えるよう要求した。それだけでなく、彼女たちは積極的に革命に参画し、デモや集会に出席し、パリケードを築き、一緒に闘った。しかし、1849年のドレーズデンでの5月蜂起の失敗後、反動の時代が訪れる。

(1) 革命期の女性たち

この時期、4紙の新聞が発行された。⁽⁷⁾ ルイーゼ・デイトマル Louise Dittmar (1807年～1884年)の『社会改革』*Soziale Reform*、マティルデ・フランツィスカ・アネケ Mathilde Franziska Annekeの『女性新聞』*Frauen-Zeitung*、ルイーゼ・アストン Louise Astonの『義勇兵 芸術と社会生活のために』*Der Freischärler. Für Kunst und soziales Leben*そしてルイーゼ・オッター＝ペータース Louise Otto=Petersの『女性新聞』*Frauen-Zeitung*である。この内、『社会改革』は時代の波の中で散逸しており⁽⁸⁾、一方、オッター＝ペータースについては次項で取り上げるので、ここではアネケとアストンについて触れたい。

2人がラディカルな女権拡張論者となったのは、自らの不幸な結婚体験から、女性を未成年扱いする社会制度を思い知らされたからであった。2人はそれぞれに不条理な社会制度や封建的政治状況を伝えるため、1人で新聞を発刊した。しかし、どちらも検閲のために短命に終わっている。

マティルデ・フランツィスカ・アネケ (1817年～1884年)は、政治的女性新聞を発行した最初の女性だった。再婚した夫を通じて、日々の政治を理解するようになり、カール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスとも交流をもつようになる。夫と共に『新ケルン新聞』*Neue Kölnische Zeitung*を発行していたが、政治的理由で夫が投獄されると、1848年9月27日から『女性新聞』を1人で発行した。しかし、カモフラージュの改名も効なく、検閲により第3号で廃刊に追い込まれている。4頁の新聞は、18世紀の道徳週刊誌に依拠して、労働者階級の問題を教育的啓蒙的に市民階級に伝える記事と、政治から除外されていた女性たちに情報を与えるために、ケルンやその周辺の時事的出来事について解説する記事から成り立っていた。

夫が出獄後、2人はバーデン自由独立闘争に参加するも敗退し、1848年の他の革命派の人々と共にアメリカに亡命する。アネケはアメリカでも初のフェミニスト雑誌を発行し、女性参政権、女性を禁治産者とする婚姻法と男女間のダブルスタンダードの解消を要求した。ドイツでは長いこと忘れ去られていた彼女だが、アメリカでは女性運動のパイオニアとして名を残している。

ルイーゼ・アストン (1814年～1871年)は、1844年に最初の夫と離婚すると、ベルリンでジョルジュ・サンドのように男装し煙草を吸っては男性グループと付き合う生活を始める。1846年に出版された詩集『野ばら』*Wilde Rosen*には自由恋愛が謳われていたためスキャンダラスな女

性として迫害をうけ、同年「国家にとっての危険人物」としてベルリンを追放されている。これに対して『私の解放、追放そして弁明』*Meine Emancipation, Verweisung und Rechtfertigung* (1846年)の中で、自分の体験、男女平等、個性を自由に展開するための女性の権利を徹底的に求めた。

1848年3月末に、デンマークがシュレースヴィヒを併合しようとしたことから北部で戦争が勃発する。プロイセン中心のドイツ連邦軍が出兵すると、彼女は義勇軍に加わり看護師として前線に赴いている。プロイセンの敗退で彼女にとっての革命も終わり、雑誌『義勇兵 芸術と社会生活のために』(1848年11月1日～12月6日の7号)を彼女と女性協力者の名前で発刊。しかし、国家の実情を攻撃したため、再導入された検閲により7号で発禁となった。そのうえ、3月革命中にベルリンに戻っていた彼女は、再度ベルリン追放となる。この雑誌には典型的な女性問題は取り上げられていない。社会が解放されれば、自動的に女性解放は導かれるとアストンは考えていたからである。

次項のルイーゼ・オットー＝ペータースを含めて、三月前期(1815年～1848年)ほど厳しく罰せられなかったにせよ、この時期に自分の新聞・雑誌を発行することは極めて勇気のいることだった。女性のために社会活動を推し進めることが、女性出版者たちの信念だったが、この時期の女性運動は1つにまとまっていたわけではなかった。アネケと彼女の夫はアストンを擁護したわずかな人々だったが、オットー＝ペータースは「女性を男性のカリカチュアに貶め、『女性解放』という言葉が不評を買うようにした、いわゆる解放された人々には私は属さない」⁹⁾とアストンを激しく批判した。多くの啓蒙された女性たちがアストンに敵対したのは、彼女がズボンを履き、煙草を吸い、自由恋愛をしたからではなく、「神を信じない」という彼女の文章のせいだった。アストンは、男性には許されている現世の官能的喜びを代償に、女性には宗教の束縛が押しつけられていると理解していた。彼女の敵対者たちは、ビーダーマイヤー期の女性たちを、彼女たちの居場所である台所から連れ出したいとは思っていたが、献身、犠牲そして愛といった女性の宗教的良心を問題にするつもりはなかったのである。

(2) 政治的女性雑誌から機関誌の発行へ

①オットー＝ペータースの『女性新聞』

この時期の最も有名な女性として、ルイーゼ・オットー＝ペータース(1819年～1895年)を挙げなければならない。彼女は『女性新聞』(1849

年4月27日～1852年6月27日)の発行者であり、後にはドイツ女性運動の組織化に尽力した人物である。

彼女が新聞を発刊したのは、女性の教育の権利、自立の権利を求めるために革命に力を尽くすよう呼びかけるためだった。毎週土曜日に発行された8頁の新聞の内容は、論文、短編小説、詩、政治報告と解説、書籍紹介など多様だったが、「周りを見れば」のコーナーは、女性の日常から政治ニュースや革命について報告した。オットー＝ペーターズは一人で執筆したのではなく、男女の協力者を頼むことができた。⁽¹⁰⁾「郵便コーナー」には、男女の読者からの意見が寄せられた。しかし、政治的緊張に充ちたこの時期、家族にも誰にも知られないよう匿名がほとんどだった。⁽¹¹⁾

この政治新聞は革命期の終盤に発刊され、革命の失敗にもかかわらず長生きできたのは、発刊地マイセンでは反革命の波が遅れて起こったためである。しかし、1851年3月に発効予定だったザクセンの新・新聞法では、女性が新聞・雑誌の編集責任者や共同編集者になることが禁止された。この法律は「オットー法」Lex Ottoと呼ばれたが、命名には彼女の旧姓が使われた。そこで、彼女はその年の1月から新聞法がまだ緩かったテューリンゲン地方のゲーラで発行を続けるが、1852年6月27日号を最後に発禁となる。1853年初頭から『ドイツ女性新聞』*Deutsche Frauen-Zeitung*として再刊されるが、これも同年7月1日が最終号となる。その時の男性出版者兼編集者のヒンツェはオットー＝ペーターズに対して不安を抱いていたことから、両者の関係の悪化が廃刊の原因と推測する研究もある。⁽¹²⁾

②「全国ドイツ女性協会」の機関誌『新しい道』*Neue Bahnen* (1866年～1920年)

作家であった夫のアウグスト・ペーターズは1848年、49年の革命闘争に加わった廉で7年の禁固刑を受けた。2人は刑務所内で婚約し、1856年に出所したアウグストと1858年に結婚している。2人はアウグストが亡くなる1864年までライプチヒで『中部ドイツ国民新聞』*Mitteldeutsche Volkszeitung*を発行し、彼女は文芸欄を担当した。

夫の死後、1865年に彼女は、教員であり女子教育の発展に尽力したアウグステ・シュミット *Auguste Schmidt* (1833年～1902年)、女学校の創設者のオットーリエ・フォン・シュタイバー *Otilie von Steyber* (1804年～1870年) それに女権拡張論者で社会教育学者のヘンリエッテ・ゴルトシュミット *Henriette Goldschmidt* (1825年～1920年) と共にライプチヒ女性教育協会 *Leipziger Frauenbildungsverein* を設立し、その年に初めてドイツ女性会議をライプチヒで開催した。会議で、地方の女

性教育協会の中央組織として全国ドイツ女性協会 Allgemeiner Deutscher Frauenverein (=ADF) を発足させた。こうして、ドイツ初の女性運動の全国組織が生まれた。彼女は30年間代表を務め、シュミットと共に機関誌『新しい道』の編集にも携わった。

この雑誌は、当時の女性運動の最も重要な機関誌だった。隔週発行され、協会の活動、陳情、女性教育、女性労働、女性の大学進学に関する記事を掲載し、ほかの家庭雑誌やフェミニズム的でない雑誌と一線を画した。ただ、協会内での女性の政治活動は反動期以来禁止されていたため、政治扇動と取られないよう細心の注意が払われた。

こうして、出版の責務を感じた勇気ある個々の女性出版者に代わって、ADFのほか「ドイツ女性教育・職業協会連合」Verband deutscher Frauenbildung- und Erwerbsverein の女性運動の全国組織が機関誌を発行する時代となった。この時期も、女性の本来の職務は主婦であり母であるという主張は一度として問題視されず、それにもかかわらず教育の権利はそれぞれの雑誌の主要テーマであった。

ADFは1890年に会員が急増し、新しい女性団体の誕生もあり、1894年3月に新たな上部中央組織として「ドイツ女性団体連合」Bund Deutscher Frauenvereine (=BDF) が誕生する。1913年頃の会員数は50万人と言われている。⁽¹³⁾

3. 19世紀末から20世紀前半までの専門的機関誌と商業雑誌

自立した政治活動誌や政党機関誌は、1848年の革命から帝国樹立までの様々な段階を経て確立し、社会主義者鎮圧法(1878年～1890年)の廃止後、自由に展開できるようになった。1890年代には『新しい道』のほかにも、労働者階級、社会民主主義、急進的なもの、ブルジョア的なもの、プロテスタント、カトリック、ユダヤ主義等、様々な女性運動組織の機関誌が発行され、政治色も濃くなる。⁽¹⁴⁾ここでは、代表的機関誌を3つと、この時期に爆発的な拡大を見せる商業女性雑誌、そして「その他」で特殊な女性雑誌を紹介する。

(1) ブルジョア穏健派の雑誌『女性』*Die Frau* (1893年～1944年)

『女性』はBDFの月刊機関誌として1893年から、ナチスによる強制的同質化を迫られて解散する1933年まで発行された。その後1944年までは、BDFの会長を務めたゲルトルート・ボイマー Gertrud Bäumer (1873年～1954年)によって発行され続けた。『女性』がナチス政権下でも発行を許されたことは、この雑誌が非政治的と受け止められたからと理解してよ

いだろう。創刊には教育学者で女権拡張論者のヘレーネ・ランゲ Helene Lange (1848年～1930年)が尽力した。女性運動の伝達のほか、ブルジョア女性に幅広く語りかけるよう努め、そのために家庭雑誌の手法を用いて、大衆文学、家事や躰などの日常記事を掲載して女性運動の目標に向けて女性たちを獲得しようとした。最初の数年間は娯楽小説が雑誌の半分を占めていた。⁽¹⁵⁾

BDFは女性の教育、より良い労働条件、社会参加を勧め、そして後には選挙権獲得のような政治的権利も要求していく。しかし、全ての団体をまとめるためには、それぞれの団体活動には口を挟まず、上部組織として穏健路線を取らざるを得なかった。初代会長アウグステ・シュミットは設立集会で、政治的傾向を持ち込まなければ、女性労働者団体も歓迎すると述べた。この留保付き発言の背景には、政治的団体での女性の活動を禁止する1908年まで有効だった結社法があったからである。BDFの会員でもあったミンナ・カウアー Minna Cauer は女性社会民主主義者の排除に抗議する新聞記事を投稿した。またクララ・ツェトキン Clara Zetkin を筆頭に排除された女性たちは、ブルジョア女性運動は自分たちの階級内での改革しか考えていないと、ブルジョア女性たちとの協働を拒否した。

第3代会長(1910年～1919年)となったボイマーは、会員数を獲得して組織の発言権を強化するため、保守的団体の取り込みを優先したため、BDFは右傾化した。したがって、多くの会員は狭義での女性運動には数え入れられず、第一義的には慈善活動に取り組んでいた。

ボイマーは、当時の多くの女性たちと同様に、教員としての職業を経て、女性教育運動を主とするブルジョア女性運動に辿り着く。第一次世界大戦時には、国家に対する貢献を示すことで女性参政権獲得を目指して「女性国民奉仕団」を結成し、食料供給、工場での経済活動において女性の自主的戦時動員を調整した。しかし、皇帝からは選挙権は与えられず、女性が初めて選挙権を手にするのは革命による敗戦によってであった。彼女は会長職を退いてからも副会長として大きな影響力を及ぼし続けた。

ボイマーは1919年にフリードリヒ・ノイマン Friedrich Neumann (1860年～1919年)等とドイツ民主党 Deutsche Demokratische Partei を結成し、1920年～32年まで国会議員に選出されている。第二次世界大戦後は、キリスト教社会同盟(=CSU)の設立に参画した。

(2) ラディカル・フェミニズム雑誌『女性運動』 *Frauenbewegung* (1895年～1919年)

女性教員として男女差別を体験したミンナ・カウアー (1841年～1922年)⁽¹⁶⁾ は、1888年ベルリンで「女性の幸福協会」を設立する。この協会は、女性にとって制限のない政治的権利を要求し、両性の「自然に基づく定義」を拒む初の女性組織となった。機関誌として『女性の幸福』 *Frauenwohl* を穏健派のランゲと共同出版していたが、二人の対立が修復不能になり、独自に出版したのが『女性運動』だった。この雑誌を通して、カウアーはBDFの穏健派の人々と激しい議論を繰り広げた。

『女性運動』はブルジョア女性運動のドイツ初のラディカル・フェミニズム雑誌である。ベルリンのレーベンタール社から出版された。編集者はリリー・フォン・ギツイキ Lily von Gizycki (後に結婚してブラウン、1865年～1916年) だったが、彼女が社会民主党に入党後は、アニタ・アウクスブルク Anita Augspurg (1857年～1943年) が編集を引き受けた。彼女の編集による付録「国会の問題と立法」により雑誌は拡大してゆく。

カウアーは1899年には、アウクスブルクやヘレーネ・シュテッカー Helene Stöcker (1869年～1943年) たちと一緒に、保守的な女性たちに対抗する「進歩的女性協会連合」Bund fortschrittlicher Frauenvereine を設立し、男女の二重のモラル、未婚の母の問題、売春や女性売買の問題に取り組んだ。さらに、1902年には、ドイツ帝国における女性選挙権を要求する最初の連合である「女性投票権ドイツ連盟」Deutscher Verband für Frauenstimmrecht の設立者の一人となった。1908年に結社法が撤廃されると、女性が政治的協会の設立や会員であることが禁じられていたプロイセンで女性選挙権運動は一気に活発化し、彼女も全国で講演を行った。

『女性運動』はラディカル・フェミニズム政策のあらゆる争点の基盤となり、特に民主主義に根ざした女性参政権を要求した。1919年に女性参政権が認められると、雑誌の主たる目的は達成された。第一次世界大戦時、反愛国的プロパガンダが罰せられる中で、カウアーは『女性運動』誌上に反戦の声を掲載して、検閲により処罰されている。

(3) プロレタリア女性運動の女性雑誌『平等』 *Die Gleichheit* (1892年～1923年)

社会民主党の機関誌である『平等』は、初の社会主義女性雑誌であり、社会主義女性運動を牽引する雑誌に成長する。前身は1880年にエマ・イーラー Emma Ihrer (1857年～1911年) が、働く女性や女子青年の利益

のために創刊した『女性労働者』*Die Arbeiterin* だった。間もなく改名し、編集に1878年以来ドイツ社会主義労働党（1890年からドイツ社会民主党=SPD）党員であったクララ・ツェトキン（1857年～1933年）⁽¹⁷⁾ が抜擢される。

これまでの社会主義プロバガンダが、主婦や女性労働者の日常の窮乏を強調した一方で、彼女は政治教育誌を目指し、女性社会主義者たちに党の方針を伝え、不平等な賃金や労働状況を明らかにし、特に10時間労働を要求した。そして、ブルジョア女性運動とは一線を画した。1907年の国際女性会議以降は、国際社会主義女性組織の機関誌でもあった。

発行部数は1900年に4000部、第一次世界大戦中に定期購読者数は2万5千人に上昇した。隔週刊で、約10頁の雑誌は2部構成になっていた。ツェトキンが執筆する巻頭記事ほか記事数本と、女性労働者の国内外での活動を伝える「小報告」があった。その後、物語、メルヘン、連載小説が続くが、女性作家たちは女性労働者の生活をテーマとしていた。1897年からは、協力者だったリリー・ブラウンが女性参政権、女性労働者の労働条件、ブルジョア女性運動、社会立法、女性や子どもの福祉についての短信を執筆した。価格を抑えるため、びっしりと印刷され、イラストなどの視覚的要素もなく見た目は良くなかった。

バルカン戦争により世界平和が脅かされると、インターナショナル社会主義事務局は、1912年11月24日、25日にバーゼルで臨時社会主義者会議を招集した。ツェトキンは反戦演説を行い、「戦争に対する闘い」という宣言が満場一致で採択された。しかし、この宣言も繰り返された反戦のアピールも効を奏さなかった。ローザ・ルクセンブルク Rosa Luxemburg（1871年～1919年）はドイツの労働者にフランスの同階級の兄弟を撃つてはならないと要求し、1914年2月にフランクフルトで1年間の禁固刑に処せられている。第一次世界大戦開戦直前に、ツェトキンは『平等』誌上で、反戦を呼びかけた。

しかし、参戦国のすべての社会主義政党は、それまで打倒を目指していたブルジョア資本主義国家のために闘った。ツェトキンは1914年11月に再度、反戦を訴えたが、社会主義女性団体は、それぞれの国のブルジョア女性運動と結びつき銃後を支えた。SPDの党幹部もプロレタリア女性も銃後に協力するよう呼びかけた。さらに戦時公債を巡る党内の対立は、社会民主党女性運動を二分することになった。

ツェトキンやルクセンブルクたちは戦時公債に賛成しないようSPDの国会議員団を動かそうとしたが失敗する。1917年4月、SPD指導部の

戦争政策や国内平和に耐えられない SPD 左派はドイツ独立社会民主党 Unabhängige Sozialdemokratische Partei Deutschlands (=USPD) を設立し、社会民主党は分裂した。新党に入ったツェトキンは『平等』の編集長のポストを失う。後はマリー・ユハス Marie Juchacz (1879 年～1956 年) が引き継いだ。ツェトキンは、USPD の女性新聞『女性闘士』*Die Kämpferin* (1919 年～1921 年) の編集を引き受けた。さらに 1919 年 1 月に、USPD の最大グループであるスパルタクス団からドイツ共産党 (=KPD) が誕生すると、今度は同年 3 月に発行された機関誌『女性共産主義者』*Die Kommunistin* (1919 年～1921 年) の編集に携わる。

ヴァイマル共和国が誕生し、女性に選挙権、被選挙権が与えられると、ツェトキンは 1920 年～1933 年までドイツ帝国議会に所属し、1920 年 7 月に共産党議員として初めて帝国議会で KPD の外交政策理念について演説している。

(4) 商業女性雑誌

1880 年代に始まるメディアの大変遷は、雑誌数の増加、新聞・雑誌のヴォリュームの増大、広告掲載による低価格化、読者数の上昇と多様化によってもたらされた。幅広い女性読者を対象に情報を掲載するグラビア女性雑誌というタイプが生まれたのも世紀転換期のことだった。

グラビア女性雑誌の発展は、高価なファッション雑誌と、1870 年以降に登場する実用的な主婦向けの雑誌との合体から始まった。例えば、『主婦の雑誌』*Das Blatt der Hausfrau* (1886 年～1944 年、1949 年～1954 年) がそれで、視覚的要素が増加していくと同時に、家事、躰、大衆小説やファッションと並んで、女性教育や就労の問題も継続的に掲載されたことが特徴だった。主婦向け雑誌は、貴族や教養市民の女性読者以外に、幅広い市民層の女性にも広がっていった。

こうした女性雑誌市場の拡大を背景に、アウグスト・シェルル August Scherl (1849 年～1921 年)、レオポルト・ウルシュタイン Leopold Ullstein (1826 年～1899 年)、ルードルフ・モッセ Rudolf Mosse (1843 年～1920 年) など新聞・雑誌コンツェルンが誕生し、大衆ジャーナリズムの時代が到来する。1914 年の女性雑誌は 215 種類で、文章主体の雑誌の方がまだ多かった。出版部数も 200～300 部、まれに 2000～3000 部といったところだったが、商業雑誌は数万～10 万部を超えるものもあり、女性雑誌市場で圧倒的な存在感を示していたのは、数々の商業女性雑誌だった。⁽¹⁸⁾

代表的な雑誌を見てみよう。1853 年に発刊された有名な家庭雑誌『ガ

ルテンラウベ』*Die Gartenlaube* (1853年～1944年、1974年～1978年、1982年～1984年)を1904年に引き継いだアウグスト・シェル社は、その年から女性向け付録として、幅広い中産階級の女性を対象として『女性の世界』*Die Welt der Frau* (1904年～1920年、1920年～1944年)を発行し、1920年からは女性向けページとして本体に組み込んだ。『ガルテンラウベ』がテキストと切り離して図版を印刷した一方、『女性の世界』では数々の写真がテキストと一体となった現代的なレイアウトであった。多様な文化、社会、娯楽が女性の視点で伝達されるようになったこと、そしてファッションや家事のテーマが広げられたことも新しい特徴だった。⁽¹⁹⁾

ウルシュタイン社から出版された『淑女』*Die Dame* (1911年～1943年)は、文化、ファッションそして社会問題を扱う上流階級の女性向け週刊誌だった。半月ないし毎月、文学マガジンの付録があったが、そこには、ベルトルト・ブレヒト、ハンナ・ヘーヒ、クルト・トゥホルスキー、カール・ツックマイヤー等が登場し、アルトゥール・シュニッツラーの『夢小説』*Traumnovelle* はここに掲載された。20年代に編集を担当した女権拡張論者のバルバラ・フォン・トレスコフ Barbara von Treskow (1895年～1972年)は、上述の作家たちを取り上げ、ユダヤ人のファッション専門店を宣伝し、有名女性ダンサーのヌード写真を掲載し、1929年には女性選挙権世界連盟ベルリン会議を詳細に報告した。『淑女』の女性像は、進歩的でエレガント、そして前衛的だった。

ウルシュタイン社からは、『淑女』や『主婦の雑誌』のほか、同じくフォン・トレスコフが編集長を務めた、発行部数10万部の『新しいファッション世界』*Neue Modewelt* (1932年～1943年)など売れ筋女性雑誌が刊行されていた。⁽²⁰⁾

(5) その他

世紀転換期からヴァイマル共和国時代の女性ジャーナリズムはテーマも領域も多種多様で、中には非常に特殊で小規模な講読グループの、例えば、『女子大生』*Die Studentin*、『女性労働者』*Die Arbeiterinnen*、『助産婦新聞』*Die Hebammen-Zeitung* といった職業的、地域分散的の雑誌が多数存在した。ベルリンで発行されたレスビアン雑誌『女友だち』*Die Freundin* (1924年8月8日～1933年3月8日発禁)⁽²¹⁾も特殊な雑誌の部類に入るだろう。

ヴァイマル共和国時代のベルリンは、ヨーロッパのホモセクシャル解放運動の中心地であり、レスビアンの自己理解も進んでいった。そうした状況の中で、現在でも名前が残るレスビアン雑誌は7誌あるが、その中で

も『女友だち』は世界初のレスビアン雑誌で、1920年代のレスビアニズムのシンボルとしてヴァイマル共和国時代で息の長い刊行物であった。とはいえ、困難もあった。1928年から1929年に青少年保護法の発効で俗悪書に指定されて中断があり、その間、『未婚女性』*Ledige Frauen*が代替発行された。1931年3月に再度俗悪書指定を受けたが、最終的にはナチス政権期に全てのホモセクシャルとレスビアン刊行物とともに「退廃的」のレッテルを貼られ発禁処分となった。

この雑誌は、ホモセクシャルの権利を守るための指導的連盟の1つである「人権連盟」*Bund für Menschenrechte*と「理想的女性の友情連盟」*Bund für ideale Frauenfreundschaft*の共通の公式機関誌であった。最初の2年間は月刊、その後、隔週、週刊になった。ページ数は8～12頁で、最後の1～2頁は広告だった。表紙の写真の多くは女性のヌードで、内容は、巻頭記事と討論記事、小説や物語、読者の意見は「『女友だち』への手紙」や「私たちの読者の意見」で掲載された。広告は「人権連盟」会員の求人広告、催物、レストラン、書籍が紹介され、読者が広告を利用することで、読者と連盟のつながりが強化された。催しでは、1930年の号に女性クラブ「ヴィオレッタ」の第4回パーティでは350人の会員が出席したこと、同じく女性クラブ「エラト」は600人定員のダンスホールを借りているという予告があり、ヴァイマル共和国時代のベルリンにおけるホモセクシャルやレスビアンの活動的な一面が窺える。もちろん社会的政治的障壁も高かったわけで、その意味で、この機関誌はレスビアンのアイデンティティという根本問題を伝達し討論する場として重要な存在だった。

4. 官製女性雑誌『ナチ女性展望』の発行

ナチスが政権を掌握すると、ジャーナリズムに対する統制と弾圧の嵐が吹き荒れた。共産党や社会民主党的新聞・雑誌は非合法化されたが、そもそもその前に両党を始め他党も解散させられたため、党の機関誌としての女性新聞・雑誌も発禁となった。強制的同質化により、ナチ化を受け入れなければ、いかなる新聞・雑誌も存続は不可能だった。モッセ社やウルシュタイン社のようなユダヤ・コンツェルンは、ナチスによって解体されたり、安価で強制買収されアーリア化された。

しかし、女性雑誌に関する限り、ナチ当局は従来の編集方針に介入しなかった。つまり、20年代～30年代の基調が続いており、家庭や職業生活で女性解放論が誌上に取り上げられることはほとんどなく、政治上の問題にならなかつたからである。しかし、第二次世界大戦の開戦と同時に宣伝

省に「雑誌ニュース部」とそれを補完する「週間ニュース部」が創設されると、女性雑誌の編集内容も細部にわたって統制を受けることになった。銃後の女性を安心させる前線報告、男手を失った職場や農村への戦時動員、物不足を乗り切る知恵や父（夫）が出征した時の心構えなどだった。戦況が厳しくなる1943年に入ると、この時期まだ生き残っていた女性雑誌は、国民の抵抗の意志、反ユダヤ・反ボルシェヴィズムの記事を強制された。ナチス政権期の女性・家庭・モード雑誌数は、1939年末に1932年の234誌とほぼ同数であった。⁽²²⁾

1931年、それまでにばらばらに存在していた多数のナチ女性組織を統合して、ナチ党の正式な女性組織「ナチ女性団」NS Frauenschaftが誕生した。翌年7月に『ナチ女性展望』はナチ女性団の機関誌として創刊される。⁽²³⁾ 1933年7月にナチ党の一党独裁が完成した時には、他の政党は存在していないことから、『ナチ女性展望』はナチス政権期の唯一の女性向け政党機関誌であった。したがって政党機関誌として、戦没将兵慰霊の日、復活祭、ヒトラーの誕生日、母の日、「ドイツ芸術の家」におけるドイツ大美術展、党大会、収穫祭、クリスマスなど暦上固定されている行事のほか、時事問題やイデオロギー的テーマの特集記事が巻頭を飾った。一方、『若い女性』*Die junge Dame*（1933年～1944年）や、この時期フォン・トレスコフが編集長を務めた『主婦の雑誌』などの商業雑誌は、ナチスに関することや政治的テーマには見向きもしなかった。

1934年に強制的同質化によってナチ化を受け入れた非ナチ女性団体が「ドイツ女性事業団」にまとめられると、ナチ女性団は会員数400万人のドイツ女性事業団の取り込みに成功し、総勢600万人にもなる女性組織の機関誌としても『ナチ女性展望』は精力的な社会福祉活動の報告や方針を発表した。⁽²⁴⁾

こうした党や女性組織の機関誌としての特徴だけでなく、『ナチ女性展望』はグラビア女性雑誌の特徴も併せ持っていた。グラビアと活版の割合はほぼ半々だった。この雑誌は、全国女性指導者ゲルトルート・ショルツ＝クリンク Gertrud Scholtz=Klink を頂点とした全国女性指導部の第4部門「新聞・雑誌・プロバガンダ」から出版されたが、この部門は何人もの女性カメラマンを抱えていた。詩や連載小説、本や映画の紹介、ファッション、レシピ、庭の手入れ、家事のアイデアなどの娯乐的・実用的記事、そして広告から構成されている点も、他の商業雑誌と変わらなかった。

編集部は、他の雑誌との競合に打ち勝つために、1933年9月1日号から2号に1回、誌上で紹介される流行服の型紙を付録にした。商業雑誌は

『ナチ女性展望』より高価だったうえ、型紙は別料金で購入しなければならなかった。この号からページも増やしているが、それもファッションや実用のページで、ファッションと料理のページを合わせると、雑誌全体の15%～20%に達した。購読者は、官製雑誌の特集記事よりも、ファッションのページや型紙、実用的な情報が目当てだったと考えられた。この戦略により、1934年2月の出版部数25万部から6月には50万部に伸び、1939年には140万部に達し、57万5千部で第2位の『主婦の雑誌』を押さえて、断然トップとなった。

読者は主に中産階級の女性たちだったが、とりわけ世界恐慌後の困窮生活から1936年によく生活の改善が見られる期間と、開戦と同時に導入された統制経済の戦中を通じて、手持ちの服から新しい服をリフォームするアイデアや「健康で、美味しく、安価」なレシピなど、『ナチ女性展望』が女性読者のために提供し続けた極めて合理的な実用情報は、ナチ女性団とドイツ女性事業団が開いた母親講習会・相談所や家政講習会・相談所と相まって、女性たちに真に生きるための知恵を与えた。⁽²⁵⁾

5. 戦後の女性雑誌— 商業女性雑誌の復活、『コンスタンツェ』と『ブリギッテ』

敗戦と戦勝国による非ナチ化政策により、ドイツ国民の価値観は転覆した。ここでは、戦後の西ドイツが廃墟から徐々に立ち直り、アデナウアー政権が極めて保守的な女性政策を堅持しながら「経済の奇跡」を経て、過剰な消費社会へ至る過程を伴走する商業女性雑誌に注目する。

戦後のドイツで新聞・雑誌を出版するには占領軍の許可が必要だった。出版者ジョン・ヤール・シニア John Jahr senior (1900年～1991年)とアクセル・シュプリンガー Axel Springer (1912年～1985年)は1947年にいち早くイギリス軍事政府から女性雑誌『コンスタンツェ』 *Constance* (1948年～1969年)⁽²⁶⁾を出版するための許可を取り、ハンブルクにコンスタンツェ出版社を設立する。1960年にシュプリンガーが抜けたため、ヤールはリヒャルト・グルーナー Richard Gruner (1925年～2010年)と共同でグルーナー+ヤール社から出版を続ける。

編集長を1957年まで務めたのは、ナチス時代にヤール社が出版した『若い女性』を1939年から手がけたハンス・フツキー Hans Huffzky (1913年～1978年)だった。ファッション、化粧、レシピ、住まいのアイデア、パートナー問題に至るまで、彼の雑誌構成は後に成立する女性雑誌の手本となった。創刊号の販売部数の6万部は年末までに30万部へ、そして60

年代までに55万部を売る女性雑誌市場のリーダーであり続けた。

成功の理由は、主に中産階級の若い女性読者を「購買者」としてではなく、「コンスタンツェの友だち」と捉え、読者と雑誌のパーソナルな関係を作り出した点である。数え切れない投書は、コンスタンツェ宛の個人的な手紙だった。さらに、男性だけで構成される編集部は、政治的社会的な女性問題は持ち出さず、女性同志より男女でお喋りしたいテーマを選んだ。『コンスタンツェ』だけでなく、恐らく戦後の女性雑誌の傾向として、女性教師的教育姿勢や感傷的で不安を感じさせる内容はすっかり取り除かれ、生きる勇気が前面に押し出された。

初年度には女性解放の議論も掲載されたが、決して女性解放誌ではなく、戦中や敗戦直後の女性の強い自立の後に、再び女性を台所へ戻す努力を支えた雑誌だった。高度成長に支えられたアデナウアー政権下で50年代に見られた保守的女性政策と軌を一にした。すなわち、夫のために快適な住まいを準備し、仕事上の出世を支援することが幸せな妻の理想像だった。

戦後の欠如の時期から経済の奇跡を経て、商品過剰な消費社会への急速な展開を『コンスタンツェ』は伴走する。ページ数は増加し、1952年の特別号からフルカラーとなり、懸賞の高額な賞金や賞品、たとえば1952年にはリビングのステイタス・シンボルだったステレオ・セット、翌年には賞ごとにフォルクスワーゲン車、スクーター、冷蔵庫、掃除機、コーヒーメーカーが並んだ。女性たちの支払い能力が高まると、読者は単なる消費者となり、かつての「友だち」という関係は消えた。

月刊誌として発行された『コンスタンツェ』は創刊号の24頁から1955年には114頁となった。輸送代上昇の問題、雑誌回覧クラブからも苦情が出されるようになった。そこで週刊に変更するも、他誌との競合に苦しむようになる。一方、広告料は重要な収入源だったが、1955年時点で広告ページは45%を占め、60年代になると、全体の3分の2以上がファッション広告となり、記事も有名人や王室についてで、雑誌としての独自性を失っていった。1969年、同じ出版社の『ブリギッテ』に吸収される形で、『コンスタンツェ』は廃刊となった。

『ブリギッテ』*Brigitte* (1954年～)⁽²⁷⁾の前身は1886年7月3日にベルリンのフリードリヒ・シルマー Friedrich Schirmer 社から発行された『この雑誌は主婦のもの』*Das Blatt gehört der Hausfrau!* だった。1905年にウルシュタイン社が引き継ぎ、誌名は1915年から『ウルシュタインの主婦の雑誌』*Ullsteins Blatt der Hausfrau* となった。ナチス時代にドイツ出版社

(旧ウルシュタイン社)から発行される時には、当然のことながらウルシュタインの名は削除され、『主婦の雑誌』*Das Blatt der Hausfrau* となった。1933年にこの雑誌の編集長になったフォン・トレスコフは、ナチスのイデオロギーを無視した雑誌作りで、57万5千部の発行部数を維持して女性雑誌市場で『ナチ女性展望』に次ぐ位置を守り、「ブリギッテの産みの親」と呼ばれている。

戦後、1949年にこの雑誌はハンブルクのドイツ出版社から継続出版され、1952年に表紙に「ブリギッテ」の名前が登場するが、「主婦の雑誌」のタイトルが完全に消えるのは1954年5月1日号からだった。グルーナー+ヤール社は、この日を『ブリギッテ』創刊の日としている。隔週刊で、内容はファッション、文化、心理、パートナー、健康、環境、住居、仕事それに政治と多岐にわたった記事を掲載している。

おわりに

学生運動をきっかけに活発化したフェミニズム運動により、多くは地方レベルで60年代、70年代に再び多様な政治的社会的機関誌が発行され始めた。女性や子どもに対する暴力、第二次世界大戦下の強姦、218条、女性・軍隊・戦争など、これまで取り上げられなかったテーマが議論された。全国へ広がった雑誌には自主プロジェクトの『勇氣』*Courage* (1976年～1984年)とアリス・シュヴァルツァー Alice Schwarzer (1942年～)が出版・編集長を務めるエマ女性出版社から発行される『エマ』*Emma* (1977年～)がある。しかし、これらの雑誌の紹介は、本論の趣旨から離れることになる。

本論では、女性を読者対象にした道徳週刊雑誌が発刊された啓蒙主義時代から、『ナチ女性展望』が廃刊となり、戦後に女性雑誌が復活するまでのおよそ250年間の展開を考察した。

メディアの大変遷は、カメラの機能向上や印刷技術の発達によってグラビア雑誌が登場し、広告掲載による低価格化で読者数が上昇し、雑誌数の増大・多様化により世紀転換期にもたらされた。シェルル、ウルシュタイン、モッセといった新聞・雑誌コンツェルンが誕生し、大衆ジャーナリズムの時代が到来する。

世紀転換期に見られる雑誌の多様化は、1つには、1848年以降段階的に確立していった政治活動誌や政党機関誌が、社会主義者鎮圧法の廃止により自由に展開できるようになったことでもたらされた。1890年代には様々な主義主張をもつ女性組織が多数誕生し、政治色の濃い機関誌も発行された。

他方、大出版社は未開拓の女性読者を獲得するために、多様な商業女性雑誌を創刊した。出版部数が10万部を超えるものもなかにはあった。今日の女性雑誌の誌面構成に通じる、当時の主婦向け雑誌の特徴は、文化、社会、娯楽を女性の視点で伝達し、ファッションや家事など幅広い実用的な記事を掲載したことだった。

1930年代初頭に創刊された『ナチ女性展望』は、上述の特徴を併せ持っていた。すなわち、ナチ党女性指導部の機関誌として政治的思想の記事やナチ女性団の活動報告を掲載する一方で、当時の社会事情、とりわけ1936年までの経済的困窮期と、開戦後の経済統制期に日常生活を乗り切る情報を読者に提供するために、商業雑誌の特徴であるファッションや家事など実用的ページに力を入れたのである。

女性雑誌の変遷を辿ることは、女性解放の長い闘いの歴史を確認することでもあった。啓蒙主義時代の道徳週刊誌は、女性を教化し教養と高い徳を身につけさせようとしたが、女性の活動範囲が家庭であることは問題視しなかった。革命の時代に危険を承知でアネケやアストンが雑誌を刊行したのは、女性を未成年者としてしか扱わない法律、宗教、社会通念と闘うためであった。19世紀後半のブルジョア女性運動は、女性の参政権獲得のために第一次世界大戦下で女性の戦時活動を展開するが、運動の考え方は性別役割分担意識から解放されてはいなかった。結局、革命による敗戦で、女性は参政権を得るが、ヴァイマル共和国時代の民主主義はつかの間で終焉を迎える。

ナチ指導部の女性イデオロギーは、女性の居場所を家庭と定め、女性を産む性とみなした。しかし、『ナチ女性展望』を発行したナチ女性団の女性たちは、ナチスの言う母性主義に立脚してはいたが、決して家庭に留まろうとはせず、むしろ民族共同体を「家庭」とみなし、「民族の母」として大々的な社会活動を展開していた。その有り様は、ナチスの政権掌握でブルジョア女性運動は断絶したのではなく、むしろナチ女性たちが、独裁政権という限定された政治下でブルジョア女性運動の目標を完成させたと言える。

戦後の基本法で男女平等は保証された。しかし、戦後の女性雑誌には、アデナウアー政権の経済政策の成功と反動的家庭政策が明確に表現されていた。

(本研究は、平成27年度～29年度、日本学術振興会科学研究費課題番号JP15K01929(基盤研究C)「帝国解体と戦後秩序構築過程における大衆メディアのジェンダー・エスニシ

ティ表象分析」(研究代表者、杉村使乃)の助成を受けたものである。)

註

- (1) 表紙には発行年月日が記載されているが、後に日にちが落ち、第12年度8号からは西暦のみとなる。ただ、記事から何月号か推測でき、「1944/45年」とだけ記載されている最終号の第13年度4号はクリスマス号である。年越しを意識した表記となった。
- (2) Brunold-Knop, Stefanie: Der Frauenjournalismus - Teil 1: Schreibende Frauen im 18. Jahrhundert. In: Geschichte-lernen.net/frauenjournalismus-18.jahrhunderthtml. (19. 08. 2016).
- (3) 最初から2年という刊行期間は、道徳週刊誌では一般的だった。第1巻(1年目の合冊)と第2巻途中まではハレで、その後はライプチヒで発行されている。第2版は1938年、第3版は1948年にハンブルクで出版されている。
- (4) Friedmann, Jacqueline: Entwicklung und Marktanalyse der Publikumszeitschriften mit weiblicher Zielgruppe. GRIN Verlag, 2005, S.5-6.
- (5) 当時の不十分な郵便体制による配達遅延が原因だった。“Charlotte von Hezel” https://de.wikipedia.org/wiki/Charlotte_von_Hezel (19. 08. 2016).
- (6) Brunold-Knop, a.a.O.
- (7) 当時、定期刊行物である雑誌と新聞は、政治的内容を持つかどうかで区別された。
- (8) Friedmann, a.a.O, S.8.
- (9) Zit. nach Brunold-Knop, Stefanie: Emanzipation im 19. Jahrhundert – Louise Otto-Peters und ihre “Frauen-Zeitung”. In: Geschichte-lernen.net/frauen-zeitung-von-louise-otto-peters (20. 08. 2016).
- (10) 執筆協力者たちについては、Brunold-Knop, (9) 参照。
- (11) Ebd.
- (12) Ebd.
- (13) “Allgemeiner Deutscher Frauenverein” https://de.wikipedia.org/wiki/Allgemeiner_Deutscher_Frauenverein (24. 08. 2016).
- (14) 第1波女性運動時代に発行された機関紙のタイトル、発行機関、編集者、発行組織については、赤木登代「ドイツ女性誌の系譜—啓蒙と娯楽の機能をめぐって」『大阪教育大学紀要』第I部門、第56巻、第2号、2008年、10～13頁参照。
- (15) “Die Frau” [https://de.wikipedia.org/wiki/Die_Frau_\(Zeitschrift\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Die_Frau_(Zeitschrift)) (24. 08. 2016).
- (16) カウアーについては、“Minna Cauer (1841-1922)” In: Frauen Media Turm. Das Archiv und Dokumentationszentrum. <URL:frauenmediaturm.de/themen-portraits/feministische-pionierinnen/minna-cauer> (24. 08. 2016) 参照。
- (17) ツェトキンおよびプロレタリア女性運動については以下参照。Schüller, Elke: Clara Zetkin. (13. 01. 2009), <http://www.bpb.de/gesellschaft/gender/frauenbewegung/35316/clara-zetkin>; Notz, Gisela: Proletarische Frauen und ihr Weg zum Kommunismus. <Linksnet.de/files/pdf/Notz%20-%20proletarische%20Frauen%20und%20Weg%20zum%20Kommunismus.pdf>. (25. 08. 2016).
- (18) Duttenhöfer, Barbara: Das Geschlecht der Öffentlichkeit. Deutsche und russische Frauenzeitschriften und ihr Publikum im frühen 20. Jahrhundert. Universitätsverlag des Saarlandes, 2013, S.57 u. 70.

- (19) Ebd, S.75.
- (20) 『淑女』およびフォン・トレスコフについては以下参照。“Familienverband der Familie v. Treskow” http://www.treskowpage.com/04_personen/04_personen_18.html (26. 08. 2016); “Die Dame” https://de.wikipedia.org/wiki/Die_Dame (26. 08. 2016).
- (21) 『女友だち』については、“Die Freundin” [https://de.wikipedia.org/wiki/Die_Freundin_\(Zeitschrift\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Die_Freundin_(Zeitschrift)) (25. 08. 2016) 参照。
- (22) ノルベルト・フライ / ヨハネス・シュミッツ (五十嵐智友訳) 『ヒトラー独裁下のジャーナリストたち』朝日新聞社、1996年、108頁。
- (23) 『ナチ女性展望』 解題は、桑原ヒサ子「資料『ナチ女性展望』全目次」、上野千鶴子ほか『軍事主義とジェンダー 第二次世界大戦と現在』インパクト出版会、2008年、所収。
- (24) ナチ女性団とドイツ女性事業団の活動については拙論参照。「ナチ女性の社会活動における戦略としての母性—ナチ・イデオロギーと女性の地位向上のはざままで—」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』No.9、2011年、37～70頁。
- (25) ファッションと料理の記事については拙論参照。「女性雑誌『ナチ女性展望』に掲載されたファッションと料理のページから再構成する第二次世界大戦下の暮らし」『敬和学園大学紀要』第21号、2012年、145～168頁。
全国各地に開設された母親講習会については、1939年までに170万人が約10万の講習会のどれかに出席し、1944年までにその数は500万人に達している。家政講習会については、1939年までに180万人が受講しており、戦時中のデータは残っていないが、この時期、講習会で得られる知識と技術は必須だったことから、母親講習会受講者数に劣らなかったと推測できる。その外、1938年までに全国2万5千か所の母親相談所の利用者は1千万人以上にのぼった。戦時中、大・中都市を中心に開設された家政相談所では、就労する主婦の二重負担を軽減するため、肉を使わないレシピ、紅茶の代わりに飲物、石鹸の節約方法、リフォーム服、家計のやりくりなど、無料で家政に関する助言や情報を得られた。(データは、ウーテ・フレーフェルト (若尾祐司ほか訳) 『ドイツ女性の社会史200年の歩み』晃洋書房、1990年、216頁)
- (26) 『コンスタンツェ』については以下参照。Bohn, Jörg: Die im März 1948 erstmals erschienene Constanze entwickelte sich innerhalb kurzer Zeit zur beliebtesten und meistverkauften Frauenzeitschrift der fünfziger Jahre. In: Sammlermagazin TRÖDLER, H8/2007; “Constanze” [https://de.wikipedia.org/wiki/Constanze_\(Zeitschrift\)](https://de.wikipedia.org/wiki/Constanze_(Zeitschrift)) (28. 08. 2016).
- (27) 『ブリギッテ』については、“Brigitte” [http://de.wikipedia.org/wiki/Brigitte_\(Zeitschrift\)](http://de.wikipedia.org/wiki/Brigitte_(Zeitschrift)) (28. 08. 2016) 参照。